

25

朝鮮人参ブームへの批判 ——香川修庵の『一本堂薬選』を中心に

向 静静

立命館大学立命館アジア・日本研究機構 専門研究員

江戸時代は、それ以前の戦が繰り返された時代に対し「天下泰平」と形容される。こうした世にあって人々は、自分の健康に腐心するようになる。そうした中で需要を急激に伸ばしたのが、長寿や万病に効くといわれた人参（朝鮮人参）であった。当時、中国商船によってもたされた唐人参、すなわち中国産朝鮮人参もあったが、一番人気が高かったのは、朝鮮産のものであった。こうした人参ブームを背景に医家らの間では、人参使用のあり方に関し論争が交わされた。その中において、人参の濫用に警鐘を鳴らした嚆矢をなすのが、香川修庵（1683～1755）の『一本堂薬選』であろう。そこで本報告では、『一本堂薬選』に基づき、修庵の朝鮮人参の濫用への批判と、日本産直根参の勧めを検討し、その意味を明らかにしたい。

修庵によれば、17世紀後半から、医家・病家の間で、人参を用いて「元氣」を補うことが流行するようになり、人参の値段も極めて高くなったという。修庵は、それを中国の医書・医家からの悪影響だと指摘したうえで、長生きするために、人参を日常的に服用するのは、かえって健康被害が生じるとし、むしろ五穀や「菜蔬（野菜）」の常食を勧めた。もっとも、修庵は人参を完全に否定したわけではない。当時、人参の国産栽培の成功によって、その産地として、中国・朝鮮に日本が加えられたものの、やはり朝鮮産人参が最も上等だと思われていた。修庵によれば、当時朝鮮産人参値段は一両「三百銭至五百銭」で、極めて高価であり、裕福な家しか購入できないのが実情であった。中には偽物や一度煎じて使用済みの人参まで市場に出回っていたという。修庵はこうした状況に鑑み、人参の真偽の見分け方を『一本堂薬選』で詳細に紹介している。

修庵によれば、古来日本諸州の山間に自生している人参のなかには、朝鮮人参と類似のものがあるという。その和名は「久末乃伊（クマノイ）」であり、これは「熊胆」を指す方言である。それは本来苦いものであるが、朝鮮人参の場合、栽培にあたって尿を肥やしとすため甘みをもつようになるという。修庵は「自然味」である苦味こそ人参の「本性」と主張した。それであれば国産の人参で十分ということもなろう。実際彼は1730～1734年の五年間、国産の直根参を「産前」「産後」や「瘡」の治療に用い、その効能を試した結果、その品質は朝鮮産人参にも勝ると主張した。

ただし、産地と関係なく、修庵は決して人参の常食を勧めない。彼は『一本堂薬選』で人参を用いずしては回復できない病気を列挙する一方、人参の代わりに、「各従其証、或用艾灸、或用肥美味、節飲食、慎起居」（病の症状に基づき、艾灸・肉食を用いること、あるいは飲食や生活習慣に気を配る）と、身近にあるものを用いて治療すること、あるいは生活習慣で回復できる病気の名前も挙げている。いわば彼は、人参の効用を明確化したうえで、その濫用を戒めるとともに、代替可能な療法を示した。

修庵と同じく人参の濫用を批判したのが、同じ古方派医家の吉益東洞（1702～1773）である。東洞は『薬徴』で、人参を延命の良薬と勧める医家の行為、あわせて病の治愈を人参に託す病人をも批判した。また先述したように中国産人参の偽物が出回っていたことを受け、彼は日本産人参の効用を認めている。

修庵・東洞のほかにも、もっぱら人参を用いて「元氣」を養うことに対する批判の声は多くあった。例えば、小畑良卓（1794～1875）の『熱病指揮』（1837）においても、当時世間一般の医家が病の症状などを弁別せず、大病で危篤に陥る病人には必ず人参を処方し、また病気に罹っていない人の間でも、高価な人参を良薬と捉え、体を補うために多用する実態を嘆いている。このように人参の濫用に対しては、江戸中期から多くの医家が反駁し始めたが、修庵の『一本堂薬選』がその嚆矢をなしたことは、あらためて強調しておきたい。